

特別講演

宗教は戦争・軍事とどう関わっているのか

——キリスト教を例に——

石川 明人

石川 ご紹介ありがとうございます。改めまして、石川明人と申します。本日はお話しをする機会をいただきました。まことにありがとうございます。どうぞ宜しくお願いいたします。

今日のタイトルですが、「宗教は戦争・軍事とどう関わっているのか」というものにさせていただきました。副題は「キリスト教を例に」としております。今日お集まりいただいた方々は、ほとんどの方が仏教関係者と伺っておりますが、特にキリスト教に関する予備知識は必要ございません。どうぞご安心ください。

まず、そもそも私がなぜこういった問題に興味を持つようになったのかをお話しして、それから本題に入ろうかと思えます。

私は、たまたまキリスト教の家庭で生まれました。祖父母の代からキリスト教なので、今風の言い方をしますと、宗教二世ではなくて、宗教三世ということになります。といっても、さほど厳格なものではなく、どちらかといえばむしろ緩い方だったと思います。それでもキリスト教の家庭として、それが「普通」という環境で育ちました。教派は聖公会です。東京にある立教大学が聖公会ですし、聖路加国際病院という大きな病院があります。これも聖公会です。私が現在勤めております大学も、たまたま聖公会です。分類としては、いちおうプロテスタントになります。

大学では宗教学を専攻しましたが、その理由も、他とは違う家庭環境だったことが大きいと思います。中高生の頃から周囲の友だちとは宗教に対する理解とか感覚が微妙に違っていることを自覚しており、そこで、宗教という営みを「客観的」「中立的」な学として研究しようとする分野があることを知って宗教学に興味を持つようになったという次第です。

一方で、私は小さい頃からなぜか戦争映画が好きでした。戦闘機の模型、プラモデル、エアガンなどのおもちゃ……、そのようなものに夢中になったりしている子どもでした。どうして子どもどものときから戦争映画が好きだったのか、自分でもちよつと不思議ですが、今思うと、時代的なめぐり合わせもあったのかもしれませんが。私が小学生のときに、一般家庭にビデオデッキが普及しました。中学生、高校生のときには、レンタルビデオ屋さんが町中にたくさんできまして、安価で気軽に映画を見ることができるようになったのです。私の中学高校時代は一九八〇年代の半ばから後半に当たりますが、それはちょうどベトナム戦争が終わって一〇年ぐらいの時期にあたり、ハリウッドでベトナム戦争ものの映画が大量につくられた時代でもあります。例えば、有名な『ランボー』はベトナム帰還兵が主人公の映画ですが、その他にも、八〇年代はベトナム戦争を背景とした戦争アクション映画が大量につくられました。そういうタイミングもあって、戦争映画を観る機会がたまたま多かったのかもしれない。八〇年代は日本の経済も好調でしたから、国内でも潤沢な資金で戦争映画が多く作られました。

また、実は石川家は陸軍家系でありまして、私の祖父と曾祖父が二代続けて共に陸軍将校でした。そんなこともあり、日本軍の戦争にも、ほんやりと興味がありました。政治的にどうこうというこだわりは一切なくて、ただ自宅に軍服を着た祖父や曾祖父の写真があったので、軍人という存在は自分にとっては決して「異質」なものではなかったわけです。日本の戦争はどういうものだったのかについても、常に問いのようなのがありました。

こんなような形で、私は一方ではキリスト教を中心とした「宗教」というものの不思議さに関心があって、また他

方では、「戦争・軍事」というものに単純で素朴な興味を持っていたというわけです。

これら二つの関心、「宗教」と「戦争・軍事」は、それぞれ全く別の関心だったのですが、あるときから、この「宗教」と「戦争・軍事」は、実は究極的には根っこが同じというか、同根の「人間的な営み」なのではないかなと考えるようになりました。宗教は、広い意味では「平和」を祈り求めるものです。もちろん、宗教によっては「救済」や「悟り」など、それぞれ言葉の上では違う表現をするかもしれませんが、広い意味では、究極的に「平和」を求めるものだとと言っても間違いではないと思います。そして、「戦争・軍事」も、それ自体は非常に血生臭いものですが、最終的には「平和」の獲得、「平和」のためにという掛け声で営まれるものだと言ってもいいと思います。少なくとも、関係者はそのように自覚する傾向が強い。今日はこの話はできませんが、宗教には軍事的側面があり、軍事にも宗教的な側面があります。「宗教」と「戦争・軍事」は、一見全く別次元のもののようにですが、実は意外と似ているという直感が、昔からぼんやりとはありました。この二つが重なる部分にある存在が、今日お話しする「従軍チャレン」という人たちののです。

なぜ従軍チャレンという存在に目を向けるようになったのか、それは次のようなきっかけでした。

私は大学で宗教学を専攻いたしまして、大学院に進んで博士論文まで書きました。博士論文のテーマは、パウル・テイリツヒという神学者の宗教芸術論でした。テイリツヒはドイツ出身で、アメリカで活躍したプロテスタントの神学者です。二〇世紀半ばの人です。宗教芸術という言葉がありますが、芸術が「宗教的」であるとはどういうことなのか、芸術というのはどういう意味で「宗教的」でありうるのか、という宗教哲学的な議論をしたわけです。広い意味での哲学・思想系の研究でした。しかし、なんとか博士論文は完成させて学位は得られたものの、その後、正直なところ、このままずっと哲学・思想研究でやっていけるかなと、自分の限界のようなものを感じ始めていました。

毎年学会に行って、同年代あるいは先輩方の哲学の研究発表を聞いていますと、みんなすごいなと圧倒されてしま

っていたのです。スポーツとか音楽の世界と似ていて、哲学・思想の世界も、誰でもがんばればある程度はできると思いますが、それ以上となると、向き不向きがあるのではないかというような、そんな気がしてきてしまったのです。要するに、自信がなくなってきたのです。

そうしたときに、ふとテリッヒというこの人物が、実は第一次大戦のときにドイツの陸軍で従軍牧師をしていたことを思い出しました。従軍牧師という言葉は知ってはいたものの、正確にどういうものかは、実はあまりよく知りませんでした。日本のテリッヒ研究者のあいだでも、彼のライフヒストリーにそうした一場面があったことは誰もが知っていました。ほとんどの人はそのことについてあまり深くは考えていないようでした。そして、そもそも日本のキリスト教研究の世界では、従軍牧師・従軍司祭に関する先行研究は意外なほど少ないことに気が付いたのです。全くなかったわけではないですが、非常に少なかつたのです。そこで、私は、次の研究テーマはこれだと思ったのです。戦争をする組織のなかに、「愛」と「平和」を唱える聖職者がいるなんて、とても不思議だからです。従軍牧師とはいったい何なのか、軍隊専属の聖職者、これは一体何なのだろうか、これを次の研究テーマにしようと思えました。そうすれば、大学の研究費で子どもときから興味があった「戦争・軍事」の本もたくさん買えます。まさに趣味と仕事が一致するという次第です。

テリッヒが従軍牧師をしたのはドイツ軍ですが、私は日本とも関係が深くて世界的にも影響力が大きいアメリカ軍を例にした方が面白いと思ひまして、アメリカの従軍牧師とは何なのか、それを調べることにしました。これについて調べようとすると、それは結局軍隊の中の一部の話なので、そもそも軍隊とはどういうものなのか、軍事とはそもそも何なのかということが分からないと、従軍牧師の位置づけが正確にわかりません。そこで、結局「戦争・軍事」、それ自体についても基礎的なことをじっくり勉強する必要が出てきました。

アメリカ軍はどういうところに特徴があるのか、日本軍はどういう点で独特だったのか、一万年の人類の戦争史の

中では、どのような武器や兵器があったのか、どのように人類は戦争をしてきたのか……。調べていくと、非常に面白いわけです。古代から現代にかけて、人々が戦争それ自体に関して積み上げてきた議論——いわゆる「戦争論」——も目からうろこの連続でした。例えば、二五〇〇年前の『孫子』、『呉子』、『六韜』など、いわゆる中国の武経七書、ヨーロッパだったらジョミニの『戦争概論』や、クラウゼヴィッツの『戦争論』など、夢中になって読みました。知れば知るほど、「戦争・軍事」というのは、それ自体がすごく重要な現実だと、改めて思うようになりました。「戦争」「軍事」ほど、人間社会に大きな影響を与えてしまうものはないからです。

平和主義の立場から、「戦争はだめです、戦争は繰り返してはいけません」と叫ぶ気持ちもよく分かります。しかし、「戦争・軍事」というのはもっと複雑な人間社会の現実であり、そうした掛け声だけで済む問題ではないという思いが強くなっていきました。「戦争・軍事」という領域には、人間としての根本的問題が詰まっています。「宗教」は人間ならではの営み、人間だけがやる、人間に固有の営みです。博士論文で扱った「芸術」というものも、人間ならではの営み、人間だけがこだわるものだと思います。そうした「宗教」や「芸術」と並んで、「戦争・軍事」というのも、同じように人間ならではの営み、人間的としか言いようがない営みだと考えるようになりました。「人間とは何か」を考えるために、「戦争・軍事」を窓にして、いろいろなことを研究することができるのではないかと考えるようになったわけです。このように、いちおう入口としては「従軍チャプレン」というテーマから入ったのですが、狭い意味での宗教学のみならず、「戦争・軍事」それ自体も、面白い、というと語弊がありますが、実に重要な問題だと思っただけで研究対象としてきました。

さて、そこで、今日はアメリカ軍を例に、従軍チャプレンというものについて簡単に紹介して、そのあと、アメリカはキリスト教の影響力が大きい国ですから、キリスト教の戦争観についてお話しをするという予定です。

まず「従軍チャプレン」という言葉ですが、これはmilitary chaplainの訳語として使っています。これまで、日

本語では「従軍牧師」「従軍司祭」と訳されてきたものです。仏教では、陣僧、従軍僧、従軍布教師（使）等とも呼ばれていたようですね。日本語で「牧師」は一般にはプロテスタントの聖職者（教師）を指す言葉で、「司祭」（神父）はほとんどの場合はカトリックの聖職者を指します。本当にプロテスタントの牧師、カトリックの司祭を指しているのであれば、別に「従軍牧師」「従軍司祭」という訳語でもいいのですが、現在ではそれ以外の宗教、例えばユダヤ教のラビ、仏教の僧侶、イスラム教のイマームとか、そういったケースもあります。また、資料によっては「チャブレン」とだけ書かれていて、その人の宗教や教派が不明な場合があります。そういうときは訳しようがありません。それだったら、最初から「チャブレン」という片仮名にしてしまった方が便利です。

そのため、「従軍チャブレン」という言葉を用いることにしているという次第です（「従軍聖職者」や「宗教要員」という訳もありえますが、現在のアメリカの大学には、無神論・無宗教のチャブレンも存在するなど、事情はわりと複雑なのです）。

さて、アメリカ軍では、従軍チャブレンは士官（オフィサー）です。そのため、例えば陸軍の少佐であると同時にプロテスタントの牧師であったり、海軍の大佐であると同時にカトリックの神父であるとか、そういった位置づけになるわけです。写真をいくつかお見せしましょう（講演の文字起こしである本稿には、一部の写真しか掲載できません。何卒ご了承ください）。

例えば、この写真（写真1）は、一九四四年の六月に撮られたも

（写真1）



のです。太平洋戦争の真つ最中のもので、場所はサイパンです。荷箱を重ねてその上にシートをかぶせて祭壇をつくり、即席の教会をつくってミサをあげているチャブレンと海兵隊員たちの写真です。

次の、こちらの写真は、硫黄島で撮られた写真です。この写真が撮られたのは、一九四五年三月三日とのことなので、戦争が終わる約五カ月前ということになります。しばらく前に、クリント・イーストウッド監督の映画で『硫黄島からの手紙』という、硫黄島守備隊の栗林忠道中将を中心に描いた作品がつけられました。栗林が最後の総攻撃をするのが、この写真が撮られた約三週間後に当たります。この写真を見ますと、もうすっかり硫黄島に米軍が上陸しちゃって、完全に占領しているみたいに見えるのですが、まだこの状態でも相当数の日本兵がこの島の地下トンネルに潜んでいたことになりました。日本軍の方は、もう食べ物も飲み水もない極限状態でしたが、米軍はこうやってチャブレンまで上陸させて、多分カトリックだと思いますが、聖餐式をやっているという、そういう写真なのです。

次に、こちらの写真は最近のもので、一〇年ぐらい前のものです。クエートのキャンプ・コヨーテというところで、海兵隊の隊員たちと礼拝をしているチャブレンの写真です。不朽の自由作戦（オペレーション・エンデュアリング・フリーダム）というアメリカの同時多発テロ以降の、いわゆる対テロ戦争と呼ばれていたあの時に、クエートに展開していた部隊に同行していたチャブレンが兵士たちと礼拝をしている様子です。この右側の眼鏡をかけている人がチャブレンで、若い兵士たちはライフルを肩に担いだまま礼拝に参加しているのです。

こちらの写真も現在のチャブレンなのですが、この迷彩柄からすると彼らは陸軍だということが分かります。一見、普通の戦闘員に見えますが、よく見ると、帽子の前の部分に黒いラテン十字のバッジがついています。彼の職種を示すものです。ここで初めて、この人は歩兵ではなく、ヘリコプター・パイロットでもなく、戦車乗りでもなく、チャブレンだということが分かります。胸元には階級章がついていて、二本線なので階級は大尉です。一〇メートルぐらい離れて徽章が見えないと、普通の戦闘員とほとんど区別が付きません。

こちらの写真は、実物のチャブレンではなくて、映画の一場面に出てくるチャブレンです。『プライベート・ライアン』という有名な戦争映画があります。この写真はその映画の冒頭の、ノルマンディ上陸作戦のシーンです。この死にかけている兵士に、チャブレンが最後のお祈りをしているのです。ほんの二〜三秒しか映らないのですが、この人のヘルメットのおでこの部分に、白いラテン十字が書かれていますので、この人がチャブレンだと分かります。そして彼の右手にはカトリック信者がお祈りの回数を数えるときに使うロザリオが握られているので、このチャブレンかあるいはこの倒れている兵士のどちらかがカトリックの信者であるということがわかります。

他にも『インディペンデンス・デイ』という宇宙人が地球を侵略しようとするSF映画がありますが、それにもほんの一瞬、空軍の制服を着た従軍チャブレンが出てきます。『史上最大の作戦』や『シン・レッド・ライン』、『ガダルカナル・ダイアリー』『グッドモーニング、ベトナム』など、その他多くの戦争映画にも、注意深く見ていると結構頻繁に従軍チャブレンが出てくるのがわかります。

さて、こちらの写真ですが、この方は誰なのかといいますと、現在の陸軍チーフ・オブ・チャブレンのウイリアム・グリーン・Jr 准将という人です。チーフ・オブ・チャブレンというのは、文字どおりチャブレンのチーフで、「チャブレン長」とでも訳しましょうか。つまりは陸軍のチャブレンの中で一番偉い人です。肩に星が一つついているので階級は准将ということが分かります。一応將軍様です。左右の襟元に十字架のバッジがついていますので、キリスト教の従軍チャブレンだということが確認できます。彼はプロテスタントの牧師であると同時に、陸軍の准将なのです。

ではこちらの写真、マイクを手に行っているこの方をご覧ください。この人は一つ前のチーフ・オブ・チャブレンで、名前はポール・K・ハーレー少将といえます。この人も、パツと見は陸軍の普通の高級士官にしか見えませんが、実は、彼はカトリックの神父なのです。彼の服にたくさん付いているバッジ類を見てみましょう。まず、左右の襟の両



(写真2)

方に十字架がついていますね。これが彼の職種つまりチャプレンであることを示していました、右胸の下の方には、白頭鷲のバッジがついていますので、第一〇一空挺師団だということも分かります。ややマニアックな話になりますが、左胸のちよつと下のところにはシニア・パラシュート・バッジがついています、これは何を意味するかというと、三〇回以上のパラシュート降下の経験があることを示すバッジになっています。さらに上の方にはコンバット・アクション・バッジもついており、これは戦地で敵との交戦、敵との遭遇を経験して、そこで適切な行動を取ったことを示すものです。もちろん彼自身は戦わないのですけれども、一応戦火の中をくぐった経験があるということを示すバッジのようです。

このポール・ハーレー少将は、元々ウエストポイントの陸軍士官学校という、陸軍の士官を養成する学校の出身者です。生粋の軍人だと言っているでしょう。はじめは大砲を扱う部隊で普通に勤務していたようですが、彼はいったん軍を辞めて、それから神学校に通い直してカトリック司祭になり、しばらくしてから再び陸軍に戻ってきて、従軍チャプレンとして勤務して、やがてチーフ・オブ・チャプレンという一番偉いところまで昇進したようです。

次に、こちらの写真(写真2)は、アメリカ軍で実際に使われていた、従軍チャプレン・キットの中古品です。

これは私の私物で、どのように手に入れたのかといえますと、今から一六〇一七年ほど前にネットオークションで買ったのです。一万円ぐらいでした。珍しいなと思って、つい衝動的に買ってしまいました。買った後に

よく考えましたら、特になにも使い道がないことに気付いたのですが、ときどきこうやって、講演とか授業で人に見せて自慢するという使い方をさせていた দিয়েおられます。これはナイロンのしつかりとしたケースでできています。中にウレタンのクッションみたいなものもちゃんと細かく入っています。十字架や、聖餐式で使うカップ、パンを乗せるお皿、ろうそく立て、聖書台などが、コンパクトに、持ち運びできるようになっているというものなのです。このようなキャブレン・キットはけっこう昔から、第一次大戦頃からつくられております。写真のこれ自体は、調べたところ、ベトナム戦争時代に使われていたものだと分かりました。

さて、こちらの写真は何なのかと申しますと、礼拝堂のようところで礼拝をしている写真に見えるのですが、実はこれは普通の礼拝堂ではなくて、空母の中なのです。ハリー・S・トルーマンという名前の原子力空母があるのですけれども、空母の中にこういう礼拝堂がちゃんとつくられているわけです。空母というのは二〇〇〇〜三〇〇〇人ぐらい乗っておりまして、ちょっとした村というか、町みたいなものなのです。その中で大勢が長期間を過ごすので、礼拝堂もちゃんと用意されているわけです。この礼拝堂を異なる宗教、教派の人たちが交代で使うのです。

次に、こちらは私が従軍キャブレンの写真で一番面白いと思っているものです。これも同じく空母ハリー・S・トルーマンの中です。後ろに翼をたたんだ戦闘機が映っております。これは空母の中の航空機格納庫の中で、洗礼式を挙げている様子なのです。洗礼というのは、キリスト教徒になる儀式です。多くの教派では牧師や司祭が指先に少し水をつけて、それで洗礼を受ける人のおでこに十字を書くようにその水をつけるという、簡単な形でやる教派が多いです。この写真の教派は「全浸礼」といって、お風呂みたいなバスタブの中に水をたっぷり入れて、足の指先から頭まで、この写真の教派は「全浸礼」といって、お風呂みたいなバスタブの中に水をたっぷり入れて、足の指先から頭まで、体全体を水に浸けて、そこから体を出すという形で洗礼式をやる教派です。面白いのは、この洗礼に使っている水を入れる大きなケースです。これは、J D A M (ジェイダム) といういわゆる精密誘導爆弾の部品を保管するケースなのです。それを洗礼式に使っていることを、わざわざこの写真のキャブションで説明されています。

た。普段はものを破壊するものを入れるケースが、今日ばかりは神の下での新たな創造のために用いられているのである、といった主旨のキャプションが書かれておりました。

こういった従軍チャプレンの写真はたくさんあって、お見せしたいものもたくさんあります。全部お見せしているときりがないので、いったんこの辺で切り上げます。

さて、アメリカ軍における従軍チャプレン制度は、合衆国憲法修正第一条に基づいて、軍隊内においても宗教的実践の自由を保障するために置かれている、というのが一応建前になっております。従軍チャプレンは、先ほども申し上げましたが「士官」にあたります。軍隊というのはピラミッド構造で、上から士官、下士官、兵、と分かれていますが、従軍チャプレンは「士官」の一員です。今の自衛隊でしたら「幹部」という言い方をしているものに相当します。アメリカ軍におきましては、陸・海・空にそれぞれ「チャプレン科」という兵科があるわけですが、これは「歩兵科」の次につくられた二番目に古い兵科で、実はけっこう歴史があるということになっていきます。

ところで、チャプレンは武器を持って戦うのかといいますと、答えは、「戦わない」ということになっていきます。今現在は、チャプレンは明確に「非戦闘員」と規定されており、武器の携帯や使用は禁止されています。南北戦争頃までは、チャプレンのなかにもマスケット銃を持って戦っていたという例もあるのですが、米西戦争の頃から「非戦闘員」という形になっております。では彼らの任務・仕事は何なのかといいますと、礼拝・洗礼式・葬儀・聖書勉強会・カウンセリング、自殺防止、ストレスマネジメントなどなど、大体こんな感じになっています。こういった仕事をする相手、対象は、当然ながら自軍の将兵とその家族ですが、一応、建前としては地域住民もそうですし、敵の捕虜に対しても十分なサポートをすることになっています。チャプレン用のマニュアルなどを見ますと、「宗教・士気・道徳」という三つの側面から将兵をフォローするのが基本だというふうの説明されております。

陸・海・空それぞれにチャプレン科という兵科があると言いました。それぞれが自分たちの仕事はどういうものな

のかということをもホームページなどで説明しているのですが、それらを分析しますと、大まかには三つのことが、彼らに共通する認識だと言いうことができるかと思えます。

まず一つ目は、「信仰」と「愛国心」の二つが重要な柱になっているということです。チャブレン科の標語というのがありまして、それはラテン語で「PRO DEO ET PATRIA (神と祖国とのために)」というものです。チャブレン科のホームページなどを見ますと、「神と国との両方に仕える者、それが陸軍チャブレンである」と書かれています。神に仕えるのが普通の聖職者、国に仕えるのが普通の軍人、そこで神と国との二つに仕えるのが従軍チャブレンなのだ、という説明なのです。

二つ目は、他の教派の聖職者たちとの出会いの素晴らしさについて強調されている点です。普通の牧師や司祭として働いていたら、普段接するのは自分と同じ教派の信徒とか同じ牧師仲間など、つまりは自分と似た人たちです。それに対して、軍隊には実にいろいろな人がいるので、違う教派はもちろん、違う宗教の人たちとも日常的に接することになります。したがって、宗教間対話とかエキメニズム、宗教的多元主義といった問題意識は、多分米軍のチャブレンの世界では、一般よりも早くからあったことは確かだろうなと思います。あるチャブレンは「あなたがここ〔陸軍チャブレン学校〕に来てチャブレン士官基礎コースを受講して、そこでいろいろな教派のチャブレンが仲良くやって互いを尊重しているのを見ると、天国とはこんな感じかと思うことでしょう」とインタビュで答えています。ちょっと大げさな言い方のような気がしなくてもありませんが、実際にそういうふうに答えている人がいます。

三つ目として挙げられるのは、一般の教会とは異なる環境ゆえの充実感とやりがいという点です。町の教会で働くのと、軍隊で働くのは、当然ながらまったく違います。部隊や基地の仲間など、自分が担当する人々との交わりを、「家族のようなもの」と表現するチャブレンが多くいます。また、軍のチャブレンになれば海外で勤務できるチャンスも多いということも、アピールされたりしていました。



(写真3)

大まかに、アメリカにおけるチャプレン制度の歴史を紹介します。
こちらの写真(写真3)は現存する従軍チャプレンの写真のなかで、おそらく最も古いものです。一八六一年の南北戦争時の戦いの前に撮られた写真、だそうです。

アメリカのチャプレン制度がいつ誕生したのかといえますと、一七七五年、独立戦争の時です。一七七五年七月二十九日に、公式にチャプレン制度が誕生したということになっています。そして、一七七八年に海軍にチャプレンが採

用されたり、一八〇二年に陸軍士官学校が設立されたりしました。

一八六一年から南北戦争が始まります。この南北戦争は、アメリカ史上最大の犠牲者を出した戦争であります。アジア太平洋戦争での日本人の死者は、軍、民を合わせて、三一〇万人といわれています。アメリカはよく戦争している国というイメージがありますが、実は、アメリカの歴史上最も多くの犠牲者が出たのは、いまだに南北戦争の約六二万人です。第二次大戦時のアメリカの死者数は、数え方にもよりますが、多く見積もっても三〇万人くらいだったかと思えます。日本の約十分の一です。南北戦争は、いまでもなおアメリカ史上最大の犠牲者を出した戦争なのです。この南北戦争のときに、初めてプロテスタント、カトリックのみならず、ユダヤ教のチャプレンが誕生しています。初めて公式に黒人部隊の黒人のチャプレンも登場しています、非公式ながら女性のチャプレンも初めて登場しています。あと、先住民族出身者のチャプレンも登場していて、要するに、南北戦争のときに



(写真4)

チャプレンの多様性が一気に広がりました。

南北戦争が終わって、次に一八九八年に米西戦争というのがあります。アメリカとスペインの戦争で、キューバあたりを舞台にした戦争です。この米西戦争が、チャプレンが国外で活動した最初の戦争ということになります。そして、チャプレンが正式に「非戦闘員」と規定されて任務に就いた、最初の戦争です。二〇世紀に入ると、「チャプレン・アシスタント」というのが誕生します。これは何かといいますと、文字どおりチャプレンの助手をする、お手伝いをする要員です。

そして、一九二〇年に「チーフ・オブ・チャプレン」という役職が誕生します。この写真(写真4)の彼はジョン・アクストン大佐という人で、初代チーフ・オブ・チャプレンです。

一九二三年、陸軍規則改定により、チャプレンの任務は専ら宗教的業務に限定されるようになりました。これはどういうことかといいますと、昔は、チャプレンは兵士たちの身の回りの世話といいますが、日常生活を総合的にフォローしてあげるようなことが期待されていたようです。文字の読み書きができない兵士もいたので、彼らが家族に出す手紙の代筆をチャプレンがしてあげたり、また、現金とか郵便物の管理をしてあげるとか、そういったこともやってあげていたようです。かなり幅広く、いろんな世話していたのだけでも、一九二三年あたりから、彼らのやることは専ら宗教的業務に限定されるようになったようです。

そして、第二次大戦があって、朝鮮戦争があって、ベトナム戦争があるわけですけども、ベトナム戦争が終わった頃に、初めて公式に女性チャプレンが誕生しています。この写真の方、ダイアナ・ポールマン・ベルさんが、公式

には最初の女性チャプレンということになっています。南北戦争のときに一応、女性チャプレンが一瞬だけ現れましたが、当時はまだ女性はだめだということで、すぐ辞めさせられる形になってしまっただけで、それからしばらく女性チャプレンはいませんでした。一九七〇年代になってようやく、女性チャプレンが公式に採用されたわけです。そして、湾岸戦争を経て、一九九三年に初のイスラム教徒のチャプレンが誕生しています。そして、二〇〇四年に、初の信徒のチャプレンが、国防総省付きで採用されています。女性の元海兵隊員です。陸軍初の信徒チャプレンは、二〇〇八年に採用されています。男性で、トマス・ダイアーさんという人なので、面白いです。彼は元バプテストの牧師だったということです。元プロテスタントの牧師が、そんなにすぐに信徒の僧侶になれるのか、私はよく分からないのですけれども、一応そういうふうに書かれていたので、そうなのだと考えるしかありません。二〇一一年には、初のヒンドゥー教徒のチャプレンが登場しております。

今では女性チャプレンも多くいて、これは二〇一二年の写真ですけれども、この時点ですでに六九人の女性チャプレンが現役任務に就いていました。かつては男性だけだったチャプレンも、いまでは女性も大勢います。人種、教派・宗教の違いも多様です。アメリカはただでさえいろいろな人種、いろいろな宗教、いろいろな文化的バックグラウンドの人が多い国ですけれども、そういう多様性が軍隊の「チャプレン科」にもそのまま反映されていると言えます。

軍人たちはみんな、自分の職種を示すバッジを身につけていますが、チャプレン用のものとしては、現在のアメリカ軍では、五種類のものを用意されています。キリスト教の十字架だけではなく、ユダヤ教だったらモーセの十戒の石板とダビデの星のマーク、仏教のチャプレンだったらこの法輪のマーク、ムスリムだったらこの三日月のマーク、ヒンドゥー教だったらオームの文字のこのマーク、という五つです。

非キリスト教チャプレンの登場をあらためてまとめますと、一八六二年、南北戦争のときに初めてユダヤ教チャプ

レンが登場して、九三年、湾岸戦争が終わってすぐに初のイスラームのチャブレンが登場して、二〇〇八年に真の人が初のムスリム・チャブレンです。二〇〇四年に国防総省付きの初の仏教徒チャブレンがきて、二〇〇八年に陸軍に初の仏教チャブレン。一年に初めてヒンドゥー教チャブレンが登場、という形になっております。

では、こういう米軍のチャブレンの活動理念や具体的な活動内容についてはどうやって知ることができるかといえますと、米軍の側がさまざまな資料を公開してくれているので、それらを見ると細部までよくわかります。

例えば、次のような資料があります。まず一つは、表紙に英語で『Religious Support』と書かれておりまして、その上に、「両方ともFM一〇五」という数字が書いてあります。このFMというのはフィールド・マニュアルの略で、日本では野戦教範と訳するのが慣例になっています。米軍はフィールド・マニュアルというものをすごく膨大に持っているのです。具体的には、〇〇式ライフルの使い方とメンテナンスの仕方、あるいは、ジャングルでのサバイバルの仕方、化学兵器に対する防御の仕方、ヘリコプター何とか作戦の概要、陸軍の法律とか、軍隊で必要なあらゆる事柄について、フィールド・マニュアルという教科書がつけられているのです。そういう膨大な教科書群の中の一つとして、フィールド・マニュアル一〇五という番号が振られているのが、『Religious Support』という巻になっています。

これは誰でも簡単にPDFで手に入れます。これを読むと、軍の中でチャブレンがどう位置づけられていて、どういった任務を任されているのか、また何が期待されているのか、どういうスキルを身につけなくてはいけないのかなどがわかります。もう少し簡単に、とりあえずアウトラインだけを知りたいという場合は、陸軍チャブレン科のホームページから、多分リクルート用のものだと思うのですが、陸軍のチャブレン科という兵科ではどういう仕事などがなされていて、どういう人を求めているのか、身分はどういうところで、どういう学歴が必要か、といったことがまとめられたカラー刷りのパンフレットみたいなものも公開されています。すでに述べたことと若干重複する部分も

ありますが、これらの資料から次のことが確認できます。

まず、軍のチャブレン制度は、先ほども言いましたように、憲法修正第一条に基づいて、宗教的実践の自由を軍隊の中においても保障するためのものだというのが大前提だということ。そして、宗教サポートの対象は、アメリカ軍の將兵およびその家族、軍で働く民間人、そして、捕虜および現地の人々だとされています。そして、今現在（二〇二三年の資料では）將兵の七八パーセントが一二八の宗教・教派いづれかの信仰を持っていて、チャブレンはそのうち一二の宗教・教派をカバーしているが、特定の宗教・教派に属していない人も、広義の宗教サポートの対象となっている、とされています。そうした宗教サポート活動は、士官である「チャブレン」、下士官である「レリジャス・アフエアーズ・スペシャリスト」（しばらく前に「チャブレン・アシスタント」から名称変更）によってなされることが書かれています。「チャブレン」は非戦闘員の士官で、それぞれの宗教の聖職者（専門家）であるというのに対して、この「レリジャス・アフエアーズ・スペシャリスト」は、チャブレンのお手伝いをするような役回りなので、下士官から選ばれます。そして、彼／彼女らはあくまでも戦闘員なので、武器を携帯してチャブレンの安全を確保する役割も担います。

次に、これも先ほどすでに言いましたが、宗教サポート活動は「宗教」「道徳」「士気」、この三つに関わるということが述べられており、具体的な仕事内容は、礼拝・洗礼式・葬儀、その他家族のケアなどです。ただし、状況によっては、所属する部隊の軍事行動が現地の宗教文化に与える影響を事前に予測し、指揮官に報告や助言をするということも仕事のひとつとされています。

そして、チャブレンには具体的には三つのスキルが重要だとされておりまして、それは（一）生者を支えること、（二）傷病者を見舞うこと、（三）死者を顕彰すること、という三点から説明されることもあります。そんなチャブレンは、宗教的多元主義の状況に適応して、さまざまな信仰を持つ軍の構成員に公平に気を配ることのできる人物でな

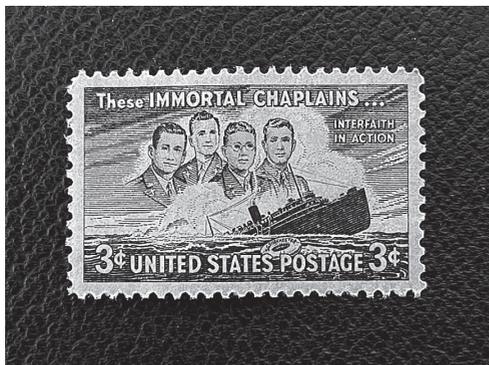
ければならないということも強調されています。自分の宗教、教派、これが正しいのだと言って無理に広めようとして宣教したりするのではなくて、さまざまな宗教的立場の人に公平に気を配ってくれということなのです。

チャブレン科のモットーは、先ほども言いました通り「神と祖国とのために」なのですが、さらに非公式のモットーもありまして、それは、「Bringing God to Soldiers, and Soldiers to God（神に兵士を、兵士に神を）」というものです。こうしたものを見る限り、やはりアメリカでは事実上はキリスト教を念頭に置いて営まれているという印象を受けます。二〇二三年現在、チャブレンは三〇一五名、レリジャス・アフエアーズ・スペシャリストは二七九六名、チャブレン候補生は五三九名だそうです。

さて、アメリカ軍のチャブレン史においてはいろいろなチャブレンがおりまして、幾人かについては伝記のような本や、チャブレン自身による戦場体験記のような本もたくさんあります。中には有名なチャブレンもいまして、中でも特に有名なのが、この「四人のチャブレン」です。英語では「フォー・チャブレンズ」と呼ばれており、この人たちが非常によく知られています。一九四三年、第二次大戦の真つ最中、ある大きな兵員輸送船がドイツ軍の攻撃を受けて沈没してしまいます。その船に乗り合わせていた四人のチャブレンが、自分たちを犠牲にして、一部の兵士たちの命を助けたということで有名になりました。

彼ら四人は、ドーチェスター号という約九〇〇人が乗る兵員輸送船に乗って、大西洋をグリーンランドに向かって航行していました。チャブレンの名は、クラーク・ポリング、ジョージ・フォックス、ジョン・ワシントン、アレキサンダー・グードといえます。

彼らの乗っていたドーチェスター号は、深夜、ドイツ軍の潜水艦Uボートに魚雷を打ち込まれてしまいます。大きな爆発と流れ込んでくる海水で、みんなパニックになりました。皆が避難しているときに、この四人のチャブレンたちが、みんなに救命胴衣を着せたり、脱出を助けたりして、最後まで船の中に留まって兵士たちが逃げるのを手伝い



(写真5)

ました。しかし、中には救命胴衣をなくしたり、持っていなかった兵士たちがいました。そんな彼らをみたこの四人のチャブレンは、それぞれが躊躇なく自分の救命胴衣を脱いで、それを持っていなかった人たちに渡して着させ、彼らを勇気づけて、希望を捨てるな等と言って、彼らが助かるようにしたのです。この四人のチャブレンたちの生き様というか、死に様が、キリスト教的な愛の精神に則しているということで評価され、有名になったという次第なのです。

この四人は、二人がプロテスタント、一人がカトリックで、もう一人がユダヤ教のラビでした。彼らはチャブレンのお手本のような存在であるとして、美談として、アメリカ軍は宣伝しました。今でも国防総省、ペンタゴンの中にもチャブレンがありますが、そのペンタゴンのチャブレルのステンドグラスの中に、こうやって四人の姿が描かれているものがあります。また、記念切手も発行されました。私も持っております。この写真（写真5）がその実物です。

もう一人、有名なチャブレンを紹介します。ベトナム戦争でチャブレンをしていたチャールズ・リテキーです。彼は、カトリックの司祭として陸軍でチャブレンをやっていました。彼が従軍したのはベトナム戦争です。ある日、リテキーは戦闘に巻き込まれます。チャブレンは武器を持ちませんが、銃弾が飛び交う中、彼は負傷した二〇名もの仲間を担いだり、引きずったりして安全なところに連れて行って彼らの命を助けました。そういう英雄的な仕事をしたということで、名誉勲章という、アメリカ軍で一番ランクの高い勲章をもらいます。ところが、後にリテキーは軍隊を辞めてしまい、さらに司祭職からも退きます。神父を辞めてしまうんです。そして、元修道女と結婚し

て、以後は平和活動家として生きていきました。彼はレーガン大統領時代に、アメリカの外交政策に対する抗議として名誉勲章を返上します。リテキーはアメリカ史上初めて名誉勲章を返上した人物となりました。彼は八十五歳で亡くなりましたが、中にはこのようにユニークな戦後を送った人もいます。

このように、チャプレンの中には、感動的な生き方というか、注目に値する生き方をした人もいます。しかし、すべてを手放して称賛できるかといえば、決してそうではありません。典型的なのは、原爆投下時のチャプレンたちの姿勢です。

原爆を投下するエノラ・ゲイが発進した場所は、テニアン基地というところです。そこに配属されていたチャプレンに、ウイリアム・ダウニーというプロテストタントの牧師がいました。チャプレンのダウニーが出撃前のエノラ・ゲイの乗組員たちを前にして行ったお祈りが残っています。「君たちがちゃんと無事に任務を遂行して、無事にこの基地に戻ってこられるように」という内容の祈りでした。これは「無事の帰還を祈っているだけだ」と言われるかもしれませんが、立場の違う人を納得させるのは難しいでしょう。

同じくテニアン基地には、カトリックの司祭もおりました。ジョージ・ザベルカというチャプレンです。彼は有名な映画監督のマイケル・ムーアとも親しい関係だったようで、ムーアも『マイケル・ムーア、語る』という自伝の中で、このジョージ・ザベルカについて言及しています。ザベルカは、自分は原爆を落としたあのエノラ・ゲイの出撃のときに、飛び立つ彼らを祝福したということを、戦後すぐ後悔したそうです。長崎に原爆を落とすときも、彼に乗組員たちを祝福しました。しかし、戦後になってから、彼は何万人もの虐殺を正当化してしまつたと非常に後悔して、彼もまた平和活動家として生きるようになりました。従軍チャプレンの中には、仲間を救つたという感動的なエピソードももちろんありますが、やはり戦争や殺戮を支えてしまつたという後悔を持つ人も少なくないということです。

さて、これまで従軍チャプレンについて見てきましたが、では、そもそもキリスト教は「戦争・軍事」についてどう考えているのでしょうか。普段は愛とか平和とか言っているのに、積極的に「戦争・軍事」に関わっているのはおかしいと思うのが普通だと思います。そこで、一体キリスト教内では、「戦争・軍事」についてどのように考えられているのかということ、簡単に見てみたいと思います。

まず、キリスト教というのは教典宗教であり、聖書を基本としています。まずはその聖書の中で、イエスやパウロは、「戦争」「軍事」についてどう言っているのかを見てみましょう。キリスト教の聖書というのは、現在では一冊の形にまとめられていることが多いですが、大きく二つに分かれています。まず、『旧約聖書』と呼ばれる部分が日本語訳で約一五〇〇ページあります。残りの約五〇〇ページが『新約聖書』といって、キリスト教オリジナルの部分になります。『旧約聖書』は、元々ユダヤ教の教典です。ユダヤ教の教典がなぜキリスト教の教典の一部になっているのかといいますと、キリスト教はそもそもユダヤ教から派生した宗教で、ユダヤ教の伝統を前提としているからです。キリスト教オリジナルの教典である『新約聖書』にも、『旧約聖書』からの引用がたくさん出てきて、『新約聖書』を前提とした内容になっています。

『旧約聖書』には戦争の描写がたくさん出てくるのですが、時間の都合上、今日はキリスト教オリジナルの『新約聖書』の方だけを見てみたいと思います。

『新約聖書』は二七の文書の集合体で、最初の四つが「福音書」というイエスの言行録になります。イエスがどういうことを言ったのか、どういうことをやったのかなど、イエスの生涯について、信仰の観点からまとめたものが「福音書」と呼ばれる文書です。その中の、イエスの言葉として伝えられている有名なものの一つに、「悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい」というものがあります。これは非常に有名な一節で、キリスト教が自らを平和主義の宗教だ、愛の宗教だと称するさいの根拠としてよく引き合いに出さ

れるものです。「ほら、こういうふうに書いてある、だからキリスト教は平和主義だ、非暴力主義だ」と言われる際に示される有名な一説です。「福音書」には他にも、「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる」なんていう言葉も出てきます。この文章だけを切り取れば、確かにキリスト教は非暴力主義としか言いようがありません。

次のようなイエスの言葉も有名です。「敵を愛し、あなたがたを憎むものに親切にしなさい。悪口を言う者に祝福を祈り、あなたがたを侮辱する者のために祈りなさい」。この「敵を愛せ」もよく知られている部分です。自分のことを良くしてくれる人、自分が大好きな人を愛する、というのはあたりまえのことであって、真の愛とは敵をも愛することだというわけです。敵を愛するような愛こそが真の愛であるといった意味で、よく言及される部分です。敵を愛せ、あなた方を憎む者に親切にしろ、何か嫌なことをやられたら、やり返すのではなく、それどころか、むしろそういう人たちのためにこそ祈ってあげなさい、というわけです。

このように、暴力を否定し、平和を尊重する態度が明らかにあるわけですが、では聖書の中でイエスやパウロは、「戦争・軍事」それ自体についてはどのように言っているのでしょうか。実は、意外だと思われるかもしれませんが、イエス自身は「福音書」の中で、「戦争・軍事」それ自体について具体的なことは何も言及していません。今あげたように、「剣を取るものは剣によって滅びる」とか「右の頬を打たれたら左の頬をも向けなさい」という平和主義・非暴力主義としか解釈しようがないような言葉はいくつか出てくるのですが、しかし「戦争をしちやいけません」とか「軍事に関わるべきではない」とか、「戦争・軍事」それ自体についての具体的な言及は、一切ないのです。イエスはそういう発言はしていない。少なくとも、現在には伝えられていません。

『新約聖書』には、パウロによって書かれた書簡も多く収められています。パウロとは、かつては厳格なユダヤ教徒でキリスト教を迫害する立場だった人物です。彼はある日、強い光に照らされて道に倒れ、目がくらんでいるさなかに、すでに死んでいるはずのイエスの声を聞きます。そして「回心」をして、一転してキリスト教を宣教する側に

なった人物です。パウロはキリスト教史において、イエスの次に重要な人物だと言っても過言ではありません。そのパウロが書いた書簡が『新約聖書』の中には多く含まれています。ところが、それらパウロの書簡の中にも、「戦争・軍事」についての具体的な言及はほとんどないのです。イエスもパウロも、非暴力主義・平和主義と取れるようなことは確かに言っています。しかし、ずばり、戦争してはいけませんとか、あるいは、正当防衛の範囲内だったら構わないとか、そうしたことをはっきりとは言っていないのです。その代わりに「敵を愛しなさい」とか一般常識とは異なった言い回しをしているので、では「悪人を実力行使で善に向かわせることは〈愛〉のうちに入るのではないか」など、信者としては解釈や行動に幅が生じてしまうわけです。

パウロの書簡の一つである「ローマの信徒への手紙」には次のような一節があります。「あなた方を迫害する者のために祝福を祈りなさい。祝福を祈るのであって呪ってはなりません」。また、同じ文書には、「愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。『復讐は私のすること、私が報復する』と主は言われる、と書いてあります」という一節もあります。復讐するは我にあり、という小説のタイトルにもなった有名な箇所で、この部分は旧約聖書からの引用です。とにかく、このように、やられたらやり返すなんてことはしちやいけな。復讐とは人間がすべきではなくて、すべて神にお任せするべきことなのである、という、そういう趣旨のことが書かれております。「戦争・軍事」それ自体に関する具体的な言及はないのですが、全体としては、明らかに平和主義的、非暴力主義的な思想と解釈するのが自然だというわけです。

「愛」と「暴力」は、普通に考えたら両立しないものだと考えられるかと思えます。しかし、「敵を愛せ」という掟を重視するならば、例えば、誰かが明らかに間違った行為をしているのを見たとき、その相手にそういうことは間違っているぞと教えてあげて、彼を力づくでも正しい道に戻してあげることが「愛」の行為ということになるのではないか、と考える人も出てきます。そういう立派からすると、暴力、実力行使というのも、決して無条件に否定さ

れるようなものではなくて、場合によっては、むしろ重要な愛の手段であろうというふうになり、必ずしも「愛」と「暴力」は矛盾しないという話にもなりえます。このように、聖書をどう解釈するかというのは、それぞれの人の恣意的判断が入り込む傾向にあります。

では、実際の教団の立場を見てみましょう。十数億人の信者がいる世界最大の宗教団体、ローマ・カトリック教会は、戦争・軍事について、どういった姿勢をとっているのでしょうか。『カトリック教会のカテキズム』という本を読むと、一応バチカンの公的な見解を知ることができます。これは、日本語訳だと八〇〇ページぐらいの分厚い本なのですが、カトリックの基本的な思想や立場がまとめられています。戦争や軍事についても、どう考えるべきかがきちんと書かれております。その第二二六五項に、「正当防衛は単に権利であるばかりではなく、他人の生命に責任を持つ者にとっては重大な義務となります。共通善を防衛するには、不正な侵犯者の有害行為を封じる必要があります。合法的な権威を持つ者には、その責任上、自分の責任下にある市民共同体を侵犯者から守るためには武力さえも行使する権利があります」と、はっきりと書かれております。つまりは、正当防衛だったら、武力を使うということは、権利のみならず義務でもあると、そういう趣旨のことが明確に書かれています。

第二バチカン公会議という、一九六五年に終わった大きな会議がありまして、このときにカトリック教会は自分たちの方針を整理しました。この第二バチカン公会議で採択された、『現代世界憲章』という文書でも、次のように書かれています。「戦争の危険が存在し、しかも十分な力と権限を持つ国際的権力が存在しない間は、平和的解決のあらゆる手段を講じたうえであれば、政府に対して正当防衛権を拒否することはできないであろう。国家の元首ならびに国政の責任に参与する者は自分に託された国民の安全を守り、この重大事項を慎重に取り扱う義務がある」。いかなるときも、とにかく暴力・武力だけは使つてはいけないというような立場には、そもそも立っていないのです。

再び『カテキズム』に戻ります。ここには、カトリック教会の公式見解として、正当防衛が許される四つの条件が

はつきり書かれています。①国あるいは諸国家に及ぼす攻撃者側の破壊行為が持続的なものであり、しかも重大で、明確なものであること。②他のすべての手段を使っても攻撃を終わらせることが不可能であるか効果をもたらさないということが明白であること。③成功すると信じられるだけの十分な諸条件がそろっていること。④武器を使用して、除去しようとする害よりもさらに重大な害や混乱が生じないこと。これらの四つの条件がそろえば、武力行使もやむを得ないというのが、ローマ・カトリック教会の考えということになります。

確かに聖書には、「剣を取る者は剣によって滅びる」「右の頬を打たれたら左の頬をも向けなさい」と書いてあります。しかし、この四つの条件がそろえば、武力行使はしようがないですね、やむを得ませんね、権利であるのみならず、場合によっては義務でさえあります、と彼らははつきりと述べているわけなのです。

さて、これの写真は、みなさんもご存知だと思いますが、有名なバチカンのスイス衛兵です。バチカン是世界で一番小さな国で、ローマ・カトリック教会の総本山です。そこで、ローマ教皇やカトリックのさまざまな施設を警備する衛兵として、こういう人たちが今もおります。こちらの写真は、一〇年ぐらい前になされたスイス衛兵の入隊式です。今でもこういうことをやっています。制服が鮮やかなオレンジとブルーの華やかなものなので、観光客にも大変人気ですが、彼らは決して単なる儀礼的な存在ではありません。古風な槍とか剣を持っていますが、実は銃もちゃんと持っています。このバチカンのスイス衛兵の紹介動画には、射撃訓練の様子なども収められています。彼らのことを「軍隊」と言えるかどうか微妙ですが、入隊条件の一つはカトリック信徒であることであり、また実際の任務もローマ教皇やカトリック関連施設の警備なので、広い意味では「宗教的武装組織」と言っても間違いではないと思います。聖書の中にどう書かれていますように、武器を完全に捨てるというつもりはさらさらなく、というのが正直なところというか、現実だと言っていると思います。

こうした傾向は最近のものではなく、昔からのものです。キリスト教の伝統だと言ってもいいでしょう。例え

ば、この剣をもった女性の絵を御覧ください。おわかりですよね。有名なジャンヌ・ダルクです。ジャンヌ・ダルクは百年戦争のとき、負けそうだったフランス軍の士気を鼓舞したミステリアスな少女です。彼女は、二〇世紀になってから「聖人」になったのです。彼女は百年戦争の時に、決して、戦争を辞めまじょうとか武器を捨てまじょうなどと言って平和を呼びかけたわけではありません。むしろ、フランス人に対してがんばって戦おうと呼びかけたのであり、そういう人が二〇世紀になってあらためて「聖人」に列せられたわけです。

次に、こちらの、天使ミカエルの絵を見てみましょう。天使ミカエルというのは、『新約聖書』の「ヨハネの黙示録」の中で、悪魔をやっつけたという趣旨の記述があることから、美術作品の題材になるときは、鎧を身につけて剣や槍を持って悪魔と戦っているという姿で描かれるのがお決まりのパターンになっています。こちらの絵、聖ゲオルギウスも同様です。彼は聖書には出てきませんが、『黄金伝説』というキリスト教の聖人についてまとめられた本の中に出てくる、有名な聖人です。この聖ゲオルギウスは悪い竜をやっつけたという伝説があることから、美術作品でもこうやって必ず武器を手にして悪い竜をやっつけている騎士の姿で描かれます。

このように、ローマ・カトリック教会の文化圏でも、平和のために武器を捨てようなどという発想は、基本的にはないのです。悪者・悪魔を見たら徹底的にやっつけるというのが、良いか悪いかは別にして、この宗教文化の伝統としてあるのだということは、否定しようがないのではないかと思います。

さて、ではプロテスタントの方はどうなのでしょう。見てきましたように、カトリック教会は『カテキズム』や第二バチカン公会議で採択された文書などで、正当防衛は認めるといふ明確な立場をとって現在に至っています。では、プロテスタントはどうか。結論から申しますと、プロテスタントにおきましても、戦争自体にはもちろん否定的ですが、武力行使は条件によっては認めざるを得ない、というのが主流の考え方になっています。

例えば、マルチン・ルターです。ルターは宗教改革の立役者ですが、彼もいくつかの文書の中で、武力というもの

はそれ自体は決していいものとは言えないけれども、場合によっては「大きな不幸を防ぐための小さな不幸」であって、それが必要なときはあるということを明確に述べています。状況によっては、武力行使は許されるというよりは、むしろ必要なものだという意味のことを述べているのです。

ツヴィングリは、自ら武器を持って戦場に行って、戦って、そして戦死しているぐらいです。カルヴァンはフランス語圏の宗教改革の指導者のな人物ですが、カルヴァンも著書の中で、「正しい戦争」「やむを得ない戦い」があるということを主張しております。二〇世紀アメリカの神学者ラインホルド・ニーバーも、彼自身はもちろん平和は大事だと考えていますが、暴力を絶対に完全に否定するということはしません。もちろん暴力がないにこしたことはないわけですが、いかなる場合もとにかく武力行使だけは一切しないというような姿勢は、場合によっては単なる無責任に他ならないと批判さえしています。彼は、平和はもちろん大切であるとはしますが、暴力を無条件に否定することには反対します。

ニーバーと同世代の神学者に、ボンヘッファーという人がいます。ボンヘッファーは残された書簡などをみますと、若くして優秀な神学者だったうえに、本当に誠実な人柄だったことがよくわかります。しかし、実は彼はヒトラー暗殺計画にも関与していたことがよく知られています。彼自身が直接手を下そうとしたわけではなく、ヒトラー暗殺計画を実行しようとしている組織の中のメンバーだったというぐらいで、実際には彼自身は別の役割を担当していましたが、そういう計画が行われていたグループに関わっており、彼自身もそれを認識していました。

さて、今までのところをざっくりまとめましょう。新約聖書には確かに平和主義・非暴力主義としか解釈できないような言葉が多くあります。そのことは間違いありません。ただし、実際のキリスト教徒たちは、決して絶対平和主義・非暴力主義を貫徹してきたとは言えません。もちろんそうした人たちはいましたので、彼らのことを無視することはできません。しかし、やはり「主流」は正戦論だったのです。正戦論とは、英語だとジャスト・ウォー・セオリ

ーといひまして、要するに、武力行使をしていい条件について議論し、やむを得ない戦争、正しい武力行使があることを認める立場です。キリスト教における正戦論は、一般にはアウグスティヌスあたりから始まったと考えられています。アウグスティヌスは四世紀から五世紀にかけての重要な思想家です。このアウグスティヌスの正戦論、すなわち、世の中にはやむを得ない武力行使があるという考え方が、十三世紀の神学者トマス・アクィナスによってあらためて整理されます。先ほど、カトリック教会の『カテキズム』では武力行使が許される四つの条件が示されているという話を紹介しました。この四条件は、このトマス・アクィナスの議論を叩き台にしてまとめられたものだと考えられます。一三世紀のトマスの正戦論が、二一世紀現在のキリスト教においても一応ベースになっていると言っていると思います。

一六世紀以降現れたさまざまなプロテスタントの神学者も、ほとんどが正戦論者です。純粋に絶対平和主義・非暴力主義を貫こうとするキリスト教徒も確かにいますが、全体からすれば、少数派と言わざるを得ません。キリスト教史において、キリスト教的な絶対平和主義や非暴力主義が「主流」と言われるほどにまで大きくなって、彼らが完全な非暴力主義の平和国家を建設したという例はいまだかつて一度もありません。「絶対平和主義」「非暴力主義」の立場を堅持する人たちもいるにはいるけれども、キリスト教の主流派・多数派は、あくまでも「正戦論」の立場、すなわち条件によっては武力行使もやむを得ないと考えるものになっています。キリスト教は戦争それ自体を否定しつつも、実際に武力行使を完全に放棄することはありませんでした。今後もないでしょう。

実際に世界史の教科書を開けば、キリスト教徒が何度も何度も戦争をしてきたことが書かれています。そこで、しばしば、キリスト教徒とか一神教が「戦争の原因」になっているのではないかと言われることがあります。時間がないのでごく簡単に触れておきますが、「キリスト教（宗教）は戦争の原因である」という命題を肯定するのは難しくです。大まかにその理由を述べます。

まず、これはキリスト教に限った話ではありませんが、一般に、ある宗教が他宗教と戦争をしていた期間は、戦争をしていなかった期間よりも、はるかに短いものです。もし、ある宗教が「戦争の原因」だと言うのであれば、その宗教が存続しているあいだは、かなり頻繁に戦争を続けていないとおかしいわけですが、実際は戦争をしていない期間がむしろほとんどなのです。宗教が戦争の「原因」だと言うならば、ではなぜ宗教があるにもかかわらず戦争しないでいられるのかを、逆に説明しなくてはいけなくなってしまいます。

戦争やテロは「特定の状況下」で起きていきますので、宗教以外にも原因があると考えるのが自然なことです。宗教が戦争を「正当化」する、「助長」するということは確かにあると思います。しかし、「正当化」するとか「助長」するということは、宗教が戦争の「原因」であるかどうかとは、やはり別問題です。

また、戦っている人が信仰をもっているということと、戦いの原因がその信仰であるかどうかというのは、全く別問題です。キリスト教徒は今、世界総人口の三三パーセントもおります。イスラム教徒が二二パーセントなので、キリスト教徒とイスラム教徒だけで五五パーセントを占めています。ヒンドゥー教が三番目に多いですが、その他いろいろな宗教を入れていきますと、今、世界総人口の八五パーセントは何らかの宗教を信じている。だとすると、地球上のどこかで起きた武力衝突に、何らかの宗教の信者が関わっているのはむしろ当然だということになります。根本的には、そもそも何を示せばその宗教が「その戦争の原因」だったと証明・論証したことになるのが不明確だと言ってもいいでしょう。また、実は「原因」というのもよく考えると非常に曖昧な概念であり、あるいは曖昧に使われる傾向があり、何をもつてして「原因」としているのかを明確にする必要もありそうです。さらに、現代では軍隊と警察は区別されるように、何を持ってして「戦争」や「軍事行動」とみなすのかも整理する必要があります。おおよそこういう点から、「宗教は戦争の原因である」という命題にはいろいろな疑問点があり、あるいは曖昧な点があるため、その真偽について簡単に首を縦に振ることはできません。

ただし、同じことは「平和」についても言えてしまうということも、付け加えておかねばならないと思います。

単純にキリスト教を「戦争の原因」とみなすことはできませんが、同様に、キリスト教は「平和の原因」と言えるのかというと、それについても首を縦に振ることはできません。キリスト教は戦争を「正当化」するということは確かにありました。戦争を「助長」することもありました。それと同じように、キリスト教は平和を「正当化」したり「助長」したりすることもありました。しかし、戦争を正当化したり助長したことが必ずしも「戦争の原因」だったとは言えないのと同じように、平和を正当化したり平和を助長することは、必ずしも「平和の原因」であったことにはなりません。平和な社会に異なる宗教家や信者をたくさん送り込めば、ただちにその世界で戦争が生じてしまうのかといういうと、当然そんなことはありえません。また、戦争をしている社会に、「愛」と「平和」を唱える宗教家を大勢送りこめば平和になるのかといったら、そんなことも当然ありえません。

結局、同じ信仰の元に生きて、同じように愛と平和を祈っているように見えても、現実的な振る舞いとして選び取られる選択はさまざまであります。それぞれが自分のやり方こそ正しいと思いついて、あるいは、正しいとは言えないけれどもこれしかないと考えて、みんな騙しだまし生きてきたし、これから先も、そうでしかあり得ないのではないかなと思う次第でございます。

司会 ありがとうございます。

さて、皆さんの質問も受けたと思いますが、われわれ仏教徒から考えて戦争論・平和論について、今まで思いもつかなかったことも、今日の講演ではございました。

今年度の中央教研では鶴飼先生から戦時中の日本仏教諸派との関係についてお話を伺うとしても、チャブレンのことをお聞きする中で、気づかなかった視点を新しくいただいた気がします。それから、衝撃的だったのは『カテキズ

ム』の記述です。仏教諸派にしても、仏教徒全体にしても、現在地域紛争に対して、いわゆる声明を出さなければいけない。けれども、それは明確な、『カテキズム』に示されているような明確で具体的な指針に基づくことを書いてしまったら大問題になりかねない、そこで明確な非難が起らないよう気を配った文言になってしまっていると、何となくそういう気がいたします。その声明のなかで、このようなことがちゃんと明確に述べられているのは、なかなかすごいことだなと思った次第です。

さて、皆さんからもいろいろのご質問を受けたと思います。

質問者一 先生、大変興味深い話をありがとうございました。先生の御著書を拝読いたしました。それで、宗教は戦争の原因にはならないということが、星川先生と石川先生のご結論になると思いますが、戦前の日蓮宗および日蓮系宗教教団の動向を見まして、少し思うところがあります。

まず、宗教はどれもそうだと思いますが、非常に簡単なプログラムに則っています。それはつまり、布教の場を広げる。とにかく広がっていかうとするのです。それが、戦争という手段を用いれば、その環境がわりあい手に入りやすいというのがあります。国柱会という団体がございまして、石原莞爾という軍の参謀が参加しておりました。石原莞爾は軍の参謀であると同時に、宗教家でもあったと理解していいと思います。彼が関わった日中戦争と満州事変について、これは国柱会の思想が背景にあつて、国柱会がこの思想を広めるために、その場所、土地を獲得するために起こしたという側面があるのではないかと思っています。そうすると、これは宗教が戦争の原因になった事例ではないかと思われませんが、この点先生はどのようにお考えでしょうか。

石川 石原莞爾の『最終戦争論』と『戦争史大観』は、中央文庫で私も読みました。石原莞爾と宮沢賢治はよくこう

した話で例に出ますね。石原莞爾は満州事変の立役者で、武力行使も辞さないような者だったのに対して、同じ国柱会の会員だった宮沢賢治は平和主義的なイメージの人物で、なぜこんなに違うのだろうかという疑問です。

国柱会が石原の思想に大きな影響を与えたことは確かだと思います。あまり詳しくは知りませんが、国柱会が日本軍の軍事行動を「正当化」したり「助長」したりした側面もあったのかもしれない。しかし、それが当時の日本の戦争全体の「原因」だったと言えるかというと、それを論証するのは難しいのではないかと思います。社会的事象の「原因」とはそもそも何か、何をもってして「原因」とするのかという根本的な問題もありますが、一般に戦争は、政治・経済・教育・地理的環境・歴史的文脈・為政者の個性など、さまざまなものが複雑に絡み合って生じるものです。宗教を重要な背景の一つだとみなすことはもちろんできますが、二〇世紀前半のこの日本の例におきましては、それを「単一の主要な原因」だとすることはできないと思います。重要な「背景」の一つだったことは否定できません。しかし、国柱会が「主要な原因」だったといたしますと、もし国柱会がなかったら日本軍の一連の軍事行動が起きなかったということもありますが、それは検証が不可能とはいえ、ちょっと考えにくいように思います。

質問者 — これが証拠になるとは思いませんが、満州国建国会議というのがあって、その写真が残っています。満州事変の前に行われた会議ですが、石原莞爾が何人かの幹部と一緒に、どうやって満州国をつくって日本に取り込むかという、そういう会議の様子を写した写真です。その壁に「南無妙法蓮華経」というお題目が掲げられている。普通だったら天皇陛下の肖像や、「八紘一宇」と書いてありそうなものですが、「南無妙法蓮華経」という日蓮聖人のお題目が掲げられている、他の天皇の肖像などは一切ない。そういう写真が一枚残っております。満州事変を起こしたのは、非常に宗教的な事件だったと私は感じていました。

石川　そういう写真があるのでですね。それは知りませんでした。とても興味深いです。石原莞爾の中で日蓮聖人への信仰が極めて大きな要素としてあって、軍事行動を正当化するよう機能していたことは確かだと思います。しかし、では逆に日蓮宗や国柱会が存在しなければ、あのときに戦争・軍事行動が起きなかったのかというと、微妙だと思います。例えば、今現在、ロシア正教ではキリル総主教が一番のトップにいて、彼もプーチンの「特殊軍事作戦」を明確に支持しています。しかし、ロシア正教とそのトップがロシア・ウクライナ戦争を支持しているからといって、その宗教がその戦争の「原因」になっているとは言えません。正当化する・助長する、という言い方はあり得ると思いますが、正教会がなかったらロシアは戦争を起さなかったかという点、それは考えにくいかなと思います。もちろんここでは、そもそも「原因」という概念をどう定義するかによりますが……。

日本の二〇世紀前半の戦争に関しては、やはり当時の日本の置かれていた政治的・経済的な状況が一番大きく影響したと思います。あの戦争は、他にも、当時の中国の政治状況、アメリカの政治状況など、さまざまな状況がこんがらがって起きた巨大な社会的現象なので、さまざまな文化の中でこれこそが原因だというものを求めるのは難しい。原因を「宗教」という一つの文化領域に求める発想自体が厳しいのではないかと私は思います。

質問者一　ありがとうございます。

司会　ありがとうございました。他にどなたかございませんか。では私からお聞きしたいことがあります。よろしいでしょうか。

石川　はい、もちろん。

司会 軍隊内のチャプレンについてです。先生がおっしゃるようにチャプレンは軍隊内の布教という側面ももっていると思います。お話の中に、チャプレンが大切にすることは宗教と道徳と士気という言葉が出てきました。宗教的多元主義という言葉もありましたが、これは湾岸戦争の頃から特に顕著になってきたはずですよ。軍隊内における、いわゆるキリスト教的な原理主義、エヴァンジェリストの人たちも中にはいると思います。特に若い人たちにあつたと思いますが、いわゆる他宗派、信条の異なるキリスト教徒に対してあまり融和的でない考え方の人たちもいると思います。人間関係の中で、チャプレンの人たちはどのように人々を融和させていくのでしょうか。その辺についてご教示下さい。

石川 時代や国によっても違うのかもしれませんが、軍人のなかには、チャプレンの存在を重視して、彼らを尊重している人もいれば、はっきり言ってそうではない人もいます。宗教に関心のある人もいれば、そんなのはどうでもいいと考える人もいるのが現実のようです。

第一次大戦に従軍したイギリス人で、後に作家になったロバート・グレイブスという人がいます。ロバート・グレイブスが『さらば古きものよ』という本の中で、従軍チャプレンについて少し触れています。彼はイギリス人で、イギリス軍には英国教会の従軍チャプレンが来るわけですが、グレイブスによれば、あいつらは大砲の砲声がとどろかない安全な日にやってきて、そこで兵士たちにタバコを二、三本渡したら、「がんばってね、じゃあ」と言って帰ってしまう。だから、あんなチャプレンを尊敬する人は一人もいなかったと、なかなか辛辣な書き方をしています。

一方で、グレイブスはローマ・カトリックのチャプレンについては一目置いているようです。カトリックのチャプレンは、独身だからよく分かりませんが、結構危険なところまで行って、人によっては戦線が崩れそうになれば自分の徽章を外して戦線を維持しようと頑張ったとして尊敬されたチャプレンもいたそうです。時期や部隊によってさまざまかもしれませんが、チャプレンの行動に一定のリスベクトをする人もいれば、どうでもいいと見る人もいたと

というのが、どうやら現実のようです。

アメリカ軍では、カトリックのチャブレンがプロテスタントの兵士の面倒を見たり、逆にプロテスタントのチャブレンがカトリックの兵士の面倒をみたりといったことは昔からなされていたようなので、将兵たちのあいだで宗教の違いがあるというのとはや当たり前の環境だとされているのではないかと思います。ご質問では「どのように人々を融合させているのか」とのことでしたが、完全な「融和」はそもそも無理なのではないかとも思います。融合はできなくても、共存はしていけるようにする、という感じではないでしょうか。チャブレン用のマニュアルなどでも、従軍チャブレンの資質として重要なことの一つに、他の宗教・教派の将兵にも公平に目を配れる人物であることが挙げられています。実際には宗教嫌いの将兵もいるでしょうが、それは軍隊の外でも同じなので、チャブレンたちもつまりは状況に合わせて振る舞っているのではないかなと思います。

司会 ありがとうございます。なかなかうまくいかないところもあるんですね。

石川 少し話がずれるかもしれませんが、第一次大戦時の「戦争フォークロア」を集めた、『スーパーナチュラル・ウォー』という本があります。日本語にも翻訳されていますが、第一次大戦のときに、兵士たちがどういうお守り、どういう迷信、験担ぎなどをしたのかという事例を集めた本です。兵士たちが阿鼻叫喚の地獄の現場で、どこまで伝統的宗教に頼れたかは分かりません。戦場で伝統的宗教の信仰を維持できた人は、意外と少なかったと証言する兵士もいるようです。一方で、これがお守りだ、ラッキーチャームだ、これを持っていけば弾に当たらない、といった「呪術」や「おまじない」レベルのことにこだわる兵士は割と多かったようです。チャブレンが担当するのは伝統的宗教ですが、それらとはまた別の次元での宗教な営みもあったようです。

司会 面白いですね。

質問者二 質問よろしいでしょうか。先生がおっしゃるチャプレンの話について、非常に色々な話があるのだと思います。その上で日本の戦争について考えると、やはりそこには宗教者が関わってきました。大陸や朝鮮半島などを侵略するにあたって、いわゆる布教、教線拡張のために戦争に関わってきました。勝っているときはその目的も達成され、死への恐怖には注意が向いていませんでした。しかし、最終的に日本は敗戦への道を辿ることとなります。先ほど先生にご紹介いただいたサイパンや硫黄島での玉砕はその例でしょう。最終的には、沖縄戦で、民間人も含めた多くの人が、死に向かっていきました。そのような状況の中、日本の宗教者はどのように振舞っていたのでしょうか。宗教者ではなくても、宗教の信者である兵隊もいました。満州にもいたでしょうし、南方戦線や沖縄にもいたはず。そういった人たちは、死に向かっていかざるを得ない、それに逆らうこともできないような状況の中で、どのようなことを考えていたのでしょうか。

石川 信仰を持っていた兵士、宗教者の兵士たちが、現場でどういうふうには振舞っていたのかについては、人それぞれとしか言いようがないでしょうから、全体としてどうだったのかということは説明が難しいです。ただ、戦没学徒の手記の類などから、そうした例をいくつか見つけることはできます。一つ個人的に印象深い例は、二二歳ぐらいのクリスチャンで海軍の特攻隊員だった人がいます。彼はプロテスタントのクリスチャンの家庭で育った人です。彼は京都帝国大学の学生でしたが、戦争のため佐世保の海兵団に入り、そのあとパイロットの促成訓練を受けて、やがて特攻隊員にされてしまい、出撃せねばならなくなりました。彼は日頃から自分のお母さんに手紙を書いていました。何通も何通も手紙を書いていて、日記も書いていました。その中に、「私はお母さんと一緒に聖書を読んでいた

日々が堪らなく懐かしいです」とか書いています。そして、いよいよ特攻出撃の前、彼は母親に、「私は行きま
すけれども、どうぞお母さんは悲しまないでください。私は讚美歌を歌いながら敵艦に突っ込みます」と書いている
のです。私はそれを読んでいて、堪らない気持ちになりました。当時は、自分がクリスチャンだからとか、自分はこ
ういう信仰があるからなどといって出撃命令を断ることなどできるはずがありませんでした。そうした中で、彼らは
どう考え、どうやって過ごしていたのか……。他にもそうした人は多くいたでしょう。でも、うまく自分を納得させ
られた人など、ほとんどいなかったのではないかなと思います。

彼の他にも、クリスチャンの特攻隊員の手記があります。その人は特攻という形で自分が死にいくことを、福音
書のなかのイエスの言葉「人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない」と無理やり重ね
合わせて納得しようとしたとも書いています。本当にそう考えていたというよりは、そう自分に言い聞かせて納得す
るしかなかった、という感じなのではないかと思えます。仏教徒の兵士も、本当にどうすればいいんだろうかと悩み
抜いて、戦闘に参加していた人も多いと思います。

質問者二 はい、ありがとうございました。

司会 あとお一人、いらっしゃれば受けたいと思います。よろしいでしょうか。

質問者三 よろしくお願ひ致します。特に興味深かったのが、チャブレンのお話の中で、エキュメニズムという言葉
をご紹介いただいたと思います。各チャブレンの中での交流や宗教研討の問題も含まれていると思うので興味深か
ったのですが、通常の交わりやその方たちが共通認識を育む場を積極的に設けているものなのでしょうか。もしご存

じであれば、お聞きかせいただければと思います。

石川　チャプレン制度が始まった初期の段階から、カトリックの兵士がいる部隊には必ずカトリックの神父を置くということは、人材の点から十分にはできなかったようです。ですから、プロテスタントの牧師がカトリックの信徒の面倒を見る、逆にカトリックの司祭がプロテスタントの兵士たちのケアをすとかということ、割と普通になされたいたようです。多くのチャプレンたちが新鮮だと感じるのは、訓練学校の環境のようです。軍のチャプレンになるためには、一〇カ月ぐらい、チャプレンセンター・アンド・スクールというところで訓練を受けなくてはいけないのですが、その訓練を受ける施設には、当然ながら、カトリックはもちろん、プロテスタントでもいろんな教派のチャプレン候補生が来ます。その訓練生活で、普段は会うことのないような異なる宗教・教派の人たちと一緒に寝起きを共にして、訓練するということが、新しい体験となるようです。アメリカ軍のチャプレン訓練学校は、実はエキュメニズムに関して先駆的な場所なのではないかと思えます。何年か前までは陸・海・空それぞれがチャプレン学校を持っていましたが、確か二〇二〇年あたりから、陸・海・空が合同して一箇所ですべてチャプレンを訓練・養成するような体制に変わったようです。ちょっと細かな情報は確かめておりませんが……。

エキュメニズムに関する議論や具体的な実践の気運が高まってきたのは、一九二〇年代ぐらいからでしょうか。宗教間の対話も二〇世紀半ばから活発に行われるようになったと思いますが、米軍の場合は、エキュメニズムとか宗教科対話といった言葉が一般に浸透するよりも前から、軍の現実的な要請から、とにかくお互いに認め合わないとどうしようもないよねという事で、ある意味自然に、ある意味強制的に、それをするようになったのではないかと思えます。エキュメニズムや宗教科対話について研究をするのであれば、アメリカ軍は面白いサンプルになるのではないかなと思います。

質問者三 はい、ありがとうございます。

司会 皆さん、どうもありがとうございました。石川先生、本当に長時間に亘って、ありがとうございます。まだまだいろいろと聞きたいことはありますが、私どもが本年度中央教研で試みる、「仏教から戦争と平和を考える」、特に戦争論をしっかりとやろう。その戦争論をしっかりとやることによって、平和論が見えてくるのではないか、そのために大変参考になるご講演を頂きましたことに感謝致します。ありがとうございます。

石川 こちらこそ、今日は本当にどうもありがとうございました。